

#### 4. 読解教材（リーディング）について

田中真理

本稿では、いわゆる一般の読解教材を「読解教材」と呼び、開発中の初級テキストの読解教材を「リーディング」と呼ぶことにする。また、これまでの資料に使われている呼称については、統一が取られていないので、その資料での呼称の後に「（リーディング）」と記すことにする。

以下の順で述べていく。

I 「リーディング」とは何か

II 全体の構成

III 作成から試用までの経緯

IV 試用版での使用状況

V 試用版に対する評価

VI 今後の課題

〔資料1〕 リーディングの登場人物

〔資料2〕 リーディング 目次（課毎の登場人物付き）

〔資料3〕 リーディング 例 10課 [みんな 忙しい]

I 「リーディング」とは何か

現在（1991年3月）、「リーディング」の目的及び他教材（「本文」及び「漢字」テキスト）との関連が再検討されようとしているが、ここでは、これまでの「リーディング」に対する理解を、いくつかの会合において提出された資料を引用することによって確認しておく。

1 〔共通理解のために〕（試案3）（1990年4月9/10日 講師6名 文責山下）  
＜テキストの指導目標＞4 言葉の背景にある日本人と日本社会への理解を深め、簡単な意見や感想を述べる事が出来るようになる。

＜テキストの構成＞3 理解

会話・読解教材（リーディング）

自然なディスコース、文章（文体）\*1 に触れる。内容理解の活動\*2を通して自然に近い日本語に親しみ、日本人の生活、習慣などを理解する。

\*1 説明文、解説文、手紙（宛名も含む）、日記、メモ・指示の文（ドリル／タスクで）、広告、記事（見出しも含む）など。

\*2 ①ざっと読んで（音読あるいは黙読）、要旨・大意をつかむ

②想像力、類推をはたらかせて読む

③入念に読む（精読）

④ディスカッション、シナリオ、ドラマなど色々な活用方法が課によって考えられる。

2 <読解教材（リーディング）ご担当の先生方へ>（夏期日本語講座に際して  
1990年7月7日 田中）

〔使用方法に関して〕

- 1) 「リーディング」は各課の最後の時間に使用することを前提とし、その課の文法事項が出て来る場面を考えて作成した。
- 2) 基本的な使用形式は学生が予習して来て、授業で確認するというものである。予習が大前提となっている。（必要であれば予習シートを作成していただきたい）
- 3) 読解は語彙リストを見ながらというのではなく、多少分からないことばがあっても想像しながら読んでいく、あるいは自分の力で辞書を引きながら読むという、中級、上級教材の目標とするところ、方法を狙っている。したがって、特殊なことばや未習の文型にしか注を付けていない。
- 4) 参考までに、J2では、読んで理解したことを絵にしたり、ディスカッションやスキットに発展させたり、作文の材料にしたりすることを考えている。

3 <読解（会話）教材（リーディング）について>（テキスト検討会、1990年  
10月30日/12月5日 村野）

- 1) 初級の読解とは？  
学習した文法項目、語彙の確認及び口頭練習を目で確認  
精読の練習
- 2) リーディングの意図したところ  
「読むこと」を楽しい経験に  
意味のある読解  
細部より内容の把握  
日本の文化背景、習慣の紹介  
留学生に対して身近な生活情報を提供する  
使用語彙、文型はかなり自由に

以上が、実際には必ずしも予想どおりにはいかなかった点多かったのだが、テキストを試用する以前に共通に理解し、意図していたことであった。

## Ⅱ 「リーディング」テキストの構成

全体は33課から成り、本文と同様、1～11課をJ1コース、12～22課をJ2コース、23～33課をJ3コースが使用することになっている。ここでは、それぞれを順に「リーディング1」、「リーディング2」、「リーディング3」と呼ぶことにする。なお、Intensive 1のコースでは1学期間で1～33課すべてを学習するため、「リーディング」テキストも3冊使用することになる。

「リーディング」テキストはそれぞれ、本文と巻末の注（英語）から成る。注を設けたのは、本文中の未習の文法項目、文型（これらはできるだけ避けるようにしたが、自然であることをめざしたために実際にはかなりある）、特殊な語彙及び未習の難解な語彙（未習であっても類推しうる語彙には注をつけていない）、会話体の縮約形及び終助詞等に対してであり、日本文化に関する説明も必要に応じて付けている。（注1）

## Ⅲ 作成から試用までの経緯

### 1 作成期間及び方法（注2）

作成期間：1990年 12～3月

作成方法：「教科書作成のためのたたき台（レッスンごとの文法項目リスト）1989年12月14日」に沿って、課毎に学習文法項目・文型の使われる場面を考えた。具体的には、主要文法項目・文型が実際の生活のどのような場面で使われるか、思いつくままにメモしておく。一つの課にはその他の文法項目・文型が1～6項目あるので、なるべくすべての文法項目・文型が出てくるようなストーリーを考える。この時点では、すでに市販されている読解教材を読んだり、参考にしたりすることは敢えてしなかった。一般的な印象として、いわゆる市販の初級読解教材はあまりおもしろくない。初級文型で学生生活を描くには、話題、場面が限られてしまうからであろう。既に述べたように「リーディング」は一課の学習の最後に位置し、学習者が自力で読むことを狙っている。そのためには「読もう」という意欲を起こさせるものでなくてはならない。多少難しくても、何回か読めば話の筋が分かって、「自力で読んだ」という満足感を学習者に与えられるものでありたい。ストーリー性のあること、笑える箇所あるいは問題提起を含むものであることをこころがけた。開発中のテキストは「ICUの学生」を対象とした「ACADEMIC PURPOSE」なものではあるが、場면을「大学」や「学生生活」に限定してしまうと話がおもしろくなくなってしまう、結果として我々の意図したことが達成できない。学生にとっては「基本語彙」「最重要語彙」あるいは「基本場面」「最重要場面」ではないかもしれないが、日本社会を理解するための大切な

「理解語彙」「理解場面」として、舞台を日本人の大人の生活の場面にまで広げた。しかしながら、真実性を追及すると実話をもとにすることになり、出来上がったものは一人の作成者の回りの限られた世界が舞台になってしまっていることも否定できない。(V-2及びVIに問題点として後述)

## 2 修正

上述のようにして出来上がった「たたき台」は、1990年1月～4月のテキスト検討会(課毎に本文とリーディングを検討)に提出し、意見を出してもらって修正した。この検討会は途中で打ち切られたが、たたき台は本文と同様に、講師の間で回覧し、コメントを書き入れてもらった。その間に、「<会話／読解>(リーディング・シラバス)(山下 1990年3月29日)」も作成され、「<場面・話題 Tentative(中間調査)>(山下 1990年4月2日)」に基づいて、本文の「イメージ」「ドリル」「タスク(発展練習)」等との場面の重複についても多少の調整を行った。

このように一とおり完成した段階で、市販の読解教材にも目を通し、また、本テキストのための「場面シラバス」とも照合し、不足していた場面を追加した。したがって、この時点では一課に複数(「試用版2」にも一部残っているが)の話があったが、追加した「郵便局」「銀行」等を舞台にした話は、結局「試用版1」の最終段階で削除された。(注3)

## 3 「試用版1」

リーディング本文と巻末の英語の注は、夏期日本語講座前に一応完成したが、表記の統一及び「漢字」テキストとの漢字の照合は間に合わなかった。当面の対処法として、日本語教育研修生に本文中の漢字にふりがなをふってもらった。

## 4 夏期日本語講座期間中の修正

「試用版1」における基本的な誤りや作成者の誤解、注の誤りは夏期講座中に訂正し、これが秋学期に使用される「試用版2」となった。表記に関しては、この時も印刷に間に合わず、そのままとなった。

## IV 試用版での使用状況

### 1 夏期日本語講座 1990年 7月 「試用版1」

「試用版1」では、テキストの表紙が『会話』となっているが、これは「会話」で構成されている場面が多かったため、通称を「会話」としていたことによる。

しかし、これは「会話」のための教材ではなく、「会話」を含めた「読解教材」であるので、「試用版2」では『リーディング』と改めた。

夏期日本語講座では、J1、J2、J3A及びJ3Bの4コースで使われた。

筆者はJ1の一部、J2、J3Aの3コースの「リーディング」のクラスを担当した。以下、使用方法、補助教材、問題点などについて、筆者の分かっている範囲で記す。

J1：授業は（筆者の場合）、予習形式。OHPを使用。

補助教材としては音声テープが作成されている。

コメントとして、「未習語彙、未習文型が多い」「読解教材が会話体であるのはおかしい」といったことが担当者から出ている。

J2：予習形式（後半は予習シートを宿題にする）。OHP使用。主として予習用に音声テープ配布。授業での試みは、「SHOW AND TELL（お国自慢）」「ディスカッション」「リーディング本文を読んで、内容を絵にする」等。一部「タスク・シート」も作成。二課毎の LESSON TEST に「リーディング」も課す。FINAL TEST ではあらかじめ予告しておき授業では未習の「リーディング本文」の読解問題を出したが、全体的によくできていた。学生からのコメントとしては、「話がおもしろい」「登場人物が外国人と日本人なので、日本文化がよく分かる」というプラスの評価や「習った文法とことばを実際に自分で使ってみることを目的としてリーディングを読んでいた」という作成側の意図どおりの使われ方がある一方で、「未習語彙や未習文型が、内容把握の妨げになる」「表記の統一がとれていない」等の問題点も指摘された。予習シートは「助けになる」と評価されている。J2では、「お国自慢」のように SHOW AND TELL をして全員が楽しく参加できた課と、作成者の狙った「落ち」を理解してくれた学生はごく一部であった、つまりストーリーが複雑すぎる課や学生の日本文化に対する理解が作成者が予想していたより未熟で説明されなければ理解できない課もあった。

J3：予習形式（後半は一部予習シートを作成）

話題がこの段階ではかなり高度になり、自然とディスカッションに発展した。教師側が小道具を特に使わなくても、学生は「読んで理解する」ことに楽しみを覚えていったようである。また、日本文化に対する理解もこのレベルではかなり進み、「単身赴任」等については積極的な発言が見られた。学生からの評価は総合的によく（J3責任者山下、鈴木）、「予習シートをもっと早くからほしかった」というコメントがあった。

## 2 秋学期 1990年 9月 「試用版2」

J 1、J 2、J 3、I (Intensive) 1 の各コースで使用された。筆者はJ 2しか担当していないので、以下の報告のうち、J 1、I 1に関しては、＜読解（会話）教材（リーディング）について＞（テキスト検討会、1990年10月30日/12月5日 村野）に、また、J 3に関しては担当者の鈴木のコメントに基づく。

秋学期には、コースによっては改訂して使用された。

J 1：改訂（会話体を叙述体書き直す）

J 2：原文のまま。音声テープ。予習シート（毎回提出を義務づけ、LESSON TEST からはずす）。ディスカッション。

J 3：原文のまま。音声テープ。予習シート（毎回）。期末テストには、筆記試験以外に会話作成（原文（叙述体）をもとに「会話」を作り、テープに吹き込んで提出する）という試みもなされる。

I 1：1～15課 原文のまま。タスク・シートを使用し、情報をとることを目的とする。

16～33課 改訂。情報を取り、内容を理解し、発話へ発展させる。

## 3 冬学期 1990年 12月 「試用版2」

J 2：改訂（会話体を叙述体書き直す）

J 3：原文のまま。予習を前提とせず、むしろその場で情報を読みとることも試みる。

## V 試用版に対する評価

### 1 夏期日本語講座における評価

以下に記すことは、主に＜RCJLE議事録 1990年8月1日＞に基づく。

- 1) 「リーディング」教材よりもむしろ「リスニング」教材に向いているのではないかという意見が音声テープ作成を手伝ってくださった外部の先生より出たが、RCJLEでは、「あくまでも読解教材である」、また、「リスニングとしては長すぎる」といったこともあり、当初の予定どおり読解教材として使用することになった。
- 2) 同様に、ドラマ化（VTR）してはどうかという意見も出たが、結局まとまらなかった。
- 3) ワークシート、タスクシート（予習シート）があると学習の助けになるので、夏期講座後半、秋学期で作成することになった。
- 4) ほとんどの話が会話で構成されているが、読解教材としては不自然ではな

いかという意見が出た。また、会話体と叙述体（大意）の両方を入れてはどうかという提案もあった。しかし、初級の初めは会話体にならざるをえないし、手紙文も出ている、また「リーディング3」では叙述体もかなり出てくるから現行でよいという声もあって、文体に関してはまとまらなかった。

（Ⅵに後述）

5) J3Bのコースでは、学生側にまだ余裕があり、別の読解教材も平行して使用しているという報告があった。

6) 分かち書き、表記の問題及び「漢字テキスト」との照合の必要性について提案された。（後に表記についての会合がもたれたが、その際、「リーディング」における固有名詞に関しては、未習でも常識的な範囲で漢字を使い、かなをふることになった。）

7) 巻末の注をもっと充実させて、文化事情の本に発展させてはどうかというコメントが外部の先生からあった。

（夏期日本語講座における学生のコメントはⅣ－1に前述）

## 2 秋学期終了時点での評価

以下は、＜読解（会話）教材（リーディング）について＞（テキスト検討会、1990年10月30日/12月5日 村野）に基づく。

### 1) 積極的に評価できる点

- a 内容が新しく、学生生活と日常的場面にふれることができる。
- b たくさん読むことに慣れる。初見の長文テキストを軽く読めるようになった。
- c ディスカッションにつなげることができるトピックが多い。
- d 大人にも楽しめる読物である。

### 2) 問題点、改善すべき点

- a 自然であることを目指したため、特に前半では、未習文型、数多くの語彙、表現があり、読解の流れを妨げる。

（未習部分に対しては巻末に英語の注のあることになっているが、それ以外にも未習部分が多くある）

（また、巻末注ではなく脚注にしてほしいという学生の希望があった）

（カタカナ語が「リーディング1」の最初の部分に多く使われているが、外国人学習者にはこちらが想像する以上に大きな負担がかかる）

- b 量が一定ではない。
- c 難易度が必ずしも易 → 難になっていない。

- d 登場人物に女性が多く、インフォーマルな発話の部分には、特に女性語のサンプルが目立つ。
- e 話題にソフトなものが多い。

問題点は大きく二つに分けられるだろう。一つは内容にかかわるもの、もう一つは難易度にかかわるものである。

前者については、作成者が複数ではなく1名であり、女性であることが影響している。後者については、Ⅳ-2の使用状況を見ても分かるように、J1及びI1において改訂されており、リーディングの前半部が難しいことは明らかなようである。また、Intensive コースのように毎日一課進むコースでは学習事項が学習者の中で熟すのを待たずに読解作業に入るのであるから、現状のテキストでは当然無理だと言える。（参考までに記すと、Jのコースでは一課に1週間近くかけている。）

難易度と関連して参考までに記しておく、冬学期のJLP・ミーティングで、J3からJ4への、またI1からI2への移行（初級から中級への移行、生教材への移行）が、例年難しかったのに対し新テキストになってから容易であったのは、リーディングが難しかったから、また長文テキストに既に慣れていたからではないかという報告があった。

## Ⅶ 今後の課題

ここでは、1991年3月2日及び3月5日に開かれたJLP・テキスト検討会、カリキュラム検討会における話し合いのまとめと、今後の改訂・手直し作業に必要なと思われる事項を挙げておく。

テキスト検討会で、筆者（田中）の提起した問題点（資料 <リーディング 1991年3月2日田中>は以下の3点である。

- 1) 「リーディング」を含め「新テキスト」をどのコースで使用するのか（今後のカリキュラムとも関連）
- 2) 前回2月19日のJLP・ミーティングで、現行のテキストを「33課から27課」にすることが提案されたが、再度「本文」テキストと「リーディング」及び「漢字」テキストとの関連を確認する必要がある。「本文」テキストに準拠する場合には、「リーディング」のストーリーの大幅な書き換えが必要となる。
- 3) 今年度の夏期日本語講座ではどのように扱うか。つまり、夏期日本語講座



へ向けての手直しと将来版へ向けての改訂という二つの作業を行なっていないかなければならない。

1)に関しては、述べるまでもなくコースの性格によって「リーディング」の目的、使用法が異なってくるのであり、現行のカリキュラムの Intenseive1 のコース（1日1課進む、つまり1課に4～5コマしか当てられない）においては現行の「リーディング」はV-2に既に述べたように使いづらい。したがって、1990年度秋学期 Intenseive1 では改訂して使わざるをえなかったが、今後新カリキュラム（1991年3月現在では1課に7～8コマを当てるコースが検討されている）に移行した時点においても問題となるであろう点について検討する必要がある。

2)に関しては、新カリキュラムでは27課より現行の33課のほうがよいということで、解決した。

3)に関しては、「リーディング」の本格的な手直しは現行の「本文」の見直し（提出文型、文法事項の整理、機能・場面との絡み合いの整理）が済んでから、行う。1991年度夏期日本語講座に向けては、現行の「リーディング」の表記を統一、version up を図るにとどめると決まった。

上述1)の、新カリキュラムに移行した時点においても問題となるであろう点というのは、言い換えれば、「リーディング」とは何かという本質的な問題であろう。例えば、これまでに何度か話題になったが現在も結論の出ていない問題に「文体」の問題がある。読解教材は会話体ではなく叙述体であるべきだという主張がある一方で、叙述体に統一する必要はない、会話体、叙述体、様々な形式があってもよい、あるいは1話に会話体と叙述体の両方をつけてはどうかという意見もある。これらは、「リーディング」を単なる読解教材ではなく、「話す」「書く」等のいろいろな活動に広げるための共通の素材として考えるという理解と、中、上級へ続けるためにも叙述体で、「書く」ためのモデルになるような教材が好ましいという、「リーディング」のとらえかたの違いから出ていると思われる。また、後者の「書く」ためのモデル教材は、「リーディング」よりもむしろ「漢字」テキストと結びつけて別教材としたほうがよいという意見も出ている。文体の問題は、「精読／多読／速読」といった読み方の方法や「予習を前提とするのか／初見で情報を読み取るのか」といったクラスの進め方とも関連してくる。今後、「本文」「漢字」テキストとのつながりとともに検討を重ねていかなければならないだろう。

最後に、改訂に向けて手直ししなければならない点を挙げておく。

- 1) 量の調整：一課1話、1～2頁の長さには統一するべきか。  
一課2話の課があってもよいか（選択の余地を残すかどうか）。
- 2) 改訂シラバスによる学習文法事項の確認：  
未習文型・文法事項を可能な限り削除する。
- 3) 難易度の調整：それぞれの課で調整するか、難しい課を他の話に差し替える。
- 4) 内容：現行のテキストの適当でない課を他の話に差し替える。  
話題、場面、登場人物等の検討  
例えば、「季節」に関しては、現行のテキストはICUでのテキスト使用時期を考えて意図的に「秋から冬」に向けて作っており（下図参照）、  
「花見」や「梅雨」はないが、最終的にこれでよいのかどうか。

〔例〕テキスト使用時の季節

	夏	秋	冬	春
J 1	○	○		
J 2	○	○	○	
J 3	○	○	○	○
I 1		○		

また、話題や登場人物に偏りがあるという点に関しては、作成者を複数にする、特に男性の視点を取り入れる等の対処が必要であろう。

- 5) 文体：前述
- 6) 注：何に対して注をつけるか、現行の注に対する問題点を整理する必要がある。注は必要最小限にとどめる、つまり未習語・表現（注4）、未習文型はなるべく使わないで他の表現に言い換える、そのために多少不自然になってもしかたがないという点は試用してみたのかなり一致した見解である。また、未習の場合、2度目に出て来た場合繰り返し注をつけるか、「リーディング1」「リーディング2」「リーディング3」通して注をつけるか等の問題もある。さらに、ここでも文体と関連するが、終助詞や縮約形についての注をとるためには、「自然な発話」から「ある程度コントロールした発話」にならざるをえない。（当初は自然な会話に「リーディング」で接するということであった） そうした場合、テキストのどのパートで、自然な会話に接するのかという問題も出てく

る。また、脚注にするか巻末注かは、目的、使用方法による。

- 7) 表記：1990年8月案（現行の文法・ドリルテキストと同じ表記。ただし、頻繁に使われる固有名詞のみ、「リーディング」においては漢字を使い、かなをふる。）で問題はないかどうか。分かち書きをする必要があるかどうか。あるとすれば、その基準をどこにおくかといった事柄が考えられる。
- 8) 使用法の確認：予習形式か教室作業か。それに応じて、予習シート・ワークシートを充実させ、紙面形式を統一していく。
- 9) 語彙リスト：必要かどうかは、目的や使用方法による。
- 10) 「リーディング」テキスト中の地図や絵：整理、書き換えの必要がある。
- 11) 登場人物の説明：必要かどうか。
- 12) 教師用手引：必要かどうか。
- 13) 音声テープ：現在、試用版2のJ2及びJ3についてはテープが作成されている。テープの必要性、活用の仕方も、「リーディング」の目的とかわる。テープでは、例えば4人の会話の部分は4人の吹き込み者で行っており、また効果音も入っているので、予習の助けになると思われる。いろいろな利用法が考えられるだろう。
- 14) 索引：最終的には、語彙・表現、文型等の索引が必要である。

（注1）注はProf. Copeland が担当した。日本語学習の経験者の視点から注をつけてもらった。

（注2）作成に直接当たったのは筆者であるが、本稿では、これまでに提出された資料に基づき、できるだけ客観的に記すように努める。ただし、本稿の文責はすべて筆者にある。

（注3）同じような場面として、ICU内の保健室「クリニック」は残ったが、ストーリー性や面白味に欠けるという批判がある。このような場面を使ってインパクトの強いストーリーを作るのは難しいことが分かる。削除された場面は、本文のドリルで補うことになっている。

（注4）現在、語彙班が「リーディング」の語彙について考察中である。

[資料1]

[リーディング 登場人物]

1990 7 16 TM

[留学生]

先輩	ヤノス m	ドイツ	アパート
	レベッカ f		アパート (つつじが丘)

同級

カレン・ブレット f	アメリカ	寮
ポール・ブレット m	イギリス	
マット m	アメリカ (サンフランシスコ)	寮
ヒルズ m	アメリカ	
ジョージ・ホワイ ト m	カナダ	寮
ラルス m	デンマーク	ホームステイ
パメラ f	フィリピン	ホームステイ
テレサ f	フィリピン	アパート
リン f	ホンコン	寮
ブンヤラット f	タイ	

その他	ビル m		寮
	ピーター m		寮
	チャロン m	タイ	(ブンヤラットの後輩)

A, B, C の類で,                      アメリカ    ドイツ    フランス    イタリア  
中国    韓国    インドネシア

[日本人]

日本人学生	佐藤夏子 f 松田 m
パメラの友人	秋代 f
担任の先生	山下まり f
先生	中尾                      レベッカの先生 平田、渡辺
パメラの家族	父(証券会社経理部長)、母、春子、秋男、次郎、(祖母) (父の部下：松島)
ラルスの家族 隣人	父、母、(鈴木)良男、洋子 宮本 (次男：健二)
ヤノスの隣人	村野 f
隣人／友人	西田 m (建設会社営業部)、 西田のフィアンセ：まゆみ(都立高校英語教師)
山下先生のマンションの住人	池田、佐々木、遠藤
その他：	
駅、スーパー、レストラン、カメラ屋の店員、日本人の客	
市役所、市立図書館、銀行、旅行会社の係員、宅配便の配達員	
大学学生課の職員、クリニックの職員	
ある夫と妻(共働き)	

m：男性  
f：女性

[資料2]

[リーディング 目次]

リーディング 1

1課	1	さいしょのクラス	先生	A (パメラ) B (ジョージ) C (カレン・ブレッド) D (ポール・ブレッド)
	2	はじめまして	ジョージ・ホワイト	鈴木良男
2課		いろいろな所で		
	1	バス停で	ヤノス	日本人
	2	駅のキオスクで	パメラ	店員 日本人
	3	スーパーで	パメラ	店員
	4	レストランで	ジョージ	店員 日本人の客A、B
3課		手紙1 [アメリカのひろしさんへ]	マット	
4課		手紙2 [みちこさんへ]	カレン	
5課	1	アパートはどうですか	佐藤(女)	テレサ リン
	2	佐藤さんのアパートで	佐藤	テレサ リン
6課	1	市役所で	ヤノス	係員
	2	図書館で	ヤノス	係員
	3	カメラやで	ヤノス	店員
7課	1	休み時間に、ろうかで	佐藤	ヤノス
	2	休み時間に、教室で	先生	カレン テレサ
8課		デート		
	1	ヤノスとブンヤラット	ヤノス	ブンヤラット
	2	1時間あとで ラルスとブンヤラット	ラルス	ブンヤラット
	3	ブンヤラットとテレサ	ブンヤラット	テレサ
	4	コンサートのあとで	ヤノス	テレサ
9課		銀行で		
	1	窓口で	ヤノス	係員
	2	自動支払い機の前で	パメラ	案内係
10課		みんな 忙しい		
	1	寮で	寮の人	テレサ (ジョージ マット ビル ラルス)
	2	ピーターさんのホームステイの家で	鈴木 父 母	良男 洋子
11課		クリスマスもお正月も終わりました		
	1	教室で	先生	カレン ビル
	2	食堂で	佐藤	パメラ ジョージ
			松田(男)	ブンヤラット

## リーディング2

12課	1 成田へ	ブンヤラット	鈴木
	2 空港で	ブンヤラット	ラルス チャロン
	3 都内へ向かうバスの中で	ブンヤラット	ラルス チャロン
13課	市民プール	ヤノス	松田 テレサ パメラ
14課	1 座談会	司会者	留学生A B C
	2 お国自慢	ドイツ人	フランス人 インドネシア人 中国人 韓国人 日本人 アメリカ人
15課	塾	(家の前で)	(ラルス) 母 宮本(隣人)
		(大学で)	ラルス パメラ 日本人A B
16課	うわさばなし		
	1 キャンパスで	パメラ	テレサ (カレン)
	2 ホームステイの家族	父親	母親 (ピーター)
17課	1 レポート	先生	ビル マット スーザン
	2 大みそか	(パメラの家)	父 母 秋男 春子
18課	食堂で	先生	ジョージ パメラ テレサ
19課	1 もし雨が降ったら (家で)	パメラ	母 春子
		(大学で)	パメラ 夏子 (秋代)
	2 駅に着いたら	ジョージ	鈴木良男
20課	1 義理チョコ	父	松島
	2 お歳暮	パメラ	母
21課	1 結婚式の日(19課の続き)	冬子	パメラ
	2 宅配便	ヤノス	村野
22課	二つの家/新しいマンションと古いアパート		
	1 先生の新しいマンション	パメラ	ヤノス 先生
	2 アパートに住む学生の1日	テレサ	

### リーディング3

23課	1 高い夕食	夫 妻
	2 寮の門限	カレン リン
24課	大変です	先生 ピーター テレサ パメラ マット
25課	やっぱり 親子	パメラ 母 祖母 春子
26課	1 何もないパーティー	パメラ 母 テレサ リン レベッカ
	2 アルバイト	ピーター 職員 (ヤノス)
27課	旅行会社で	ヤノス ジョージ 係員
28課	先生の研究室で	レベッカ 中尾先生
29課	1 作文ー私の先輩ー	ブンヤラット レベッカ
	2 先生の話 ーマンションー1	住人：池田、佐々木
30課	先生の話 ーマンションー2	池田 佐々木 遠藤 山下 (先生)
31課	早めに治しましょう (教室で)	先生 テレサ パメラ
	(クリニックで)	職員 パメラ テレサ
	(教室で)	先生 テレサ パメラ ジョージ
32課	日本社会1 転職	ヤノス 西田
33課	1 日本社会2 転勤／単身赴任	(ヤノス) 西田 まゆみ
	2 また会う日まで	パメラ テレサ (レベッカ ヤノス)
		(渡辺 平田 中尾先生)



[資料 3]

10課

[みんな 忙しい]

1 [寮で]

(寮に電話が <sup>2</sup>かかってくる)

寮の人：はい。こちらは第一男子寮です。

テレサ：すみませんが、ジョージさんをお願ひします。<sup>2</sup>

寮の人：はい。ちょっと 待ってください。

(ジョージを部屋へ呼びに行く)

もしもし、お待たせしました。あの、ジョージさんは 今 ふろに  
入っています。

テレサ：そうですか。それじゃ、マットさんをお願ひします。

寮の人：はい、ちょっと 待ってください。

マットさん、マットさん。 (名札をチェックしながら)<sup>4</sup>

すみません。マットさんは 今 出かけています。

テレサ：あのう、それじゃ、ビルさんは？

(ビルのルームメイトのラルスが 通りかかる)

寮の人：あっ、ラルスさん、ちょっとちょっと。ビルさんをお呼んで来てくださ  
い。電話です。

ラルス：ビルさんですか。ビルさんは 今 ヘヤで ねていますよ。

寮の人：すみません。ビルさんは 今 ねています。起こしましょうか。<sup>5</sup>

テレサ：いえ、けっこうです。<sup>6</sup> また かけます。

どうも いろいろ すみませんでした。

寮の人：いえ、どういたしまして。